文五郎の「おの染」と「おの園」（二）

『艶容女舞衣』

酒屋の園

大西重孝

かしらは「娘」油付の鴛鴦髷、花簪にとき色と水浅黄の花掛。紫がかつた青系統の小紋縮緬の着付に、黒襦子の帶、とき色のしごき。『云はねばならぬことあれど、孝行な嫁女の手前、胸がつまつて云ひ難い、宗岸殿奥の間で云ひ明かさん』と、半兵衛が女房と共に宗岸を伴ひ、上手の筋違ひ屋臺へ姿を消すと、日暮れて間もない茜屋の店先は物悲しい沈默に陷る。

「（シャ〳〵チーン、シャン）跡にイはーアア、アアー、アアー、アアア……（チーントーン）」下手寄りの壁際で、手をついて三人を見送つたお園が顏をあげると、何時の間にか部屋の内に忍び入つた夕闇に初めて氣がついた心で、納戸口から行燈を持つて來て、下手寄り框のところに据ゑ、燈を指先で搔き立て、ついた油を鬢につけてから、力なく立上り、右手を行燈の上に添へて正面向ふに目をやり「園が……」靜かに眞中に戻つて坐り、上手の一間に向つて合掌するのが「うきイおもーひ（シャン）」一杯である。「かゝれエーとてしもうばアーたまの……」正面となつて、右手を懷に挿入れて頂垂れるが（チチーン）で漸く顏をあげて、一寸向ふを見てから立上り「世の味氣なさ身一つに、結ぼーれとけェぬ片糸の（シャーン）くウりー（チーン）かーアア、へエェしーたアるウーウーウウウウー」までの間に、行燈の後を下手へ通り土間に下り、上手へ氣をかねながら木戸口に行き、一足踏出して兩手を柱にかけると「ひイとー オオリー イイごーとー……」となる。（チ、チ、チ、チ、チーン、チ、チ、チーン）で、歸らぬ夫を戀慕ひ、淋しく向ふを見やつて『今頃は……半七様』と云ひ「どこにーイ」左からクリ頭をして「どオしてーェェどざアろーぞ」頭を細く顫はせて、やがてその面を伏せる。以前、兩手を懷に入れて木戸に背をもたせて『今頃は……』となる型を用ひたこともあるが、それは新しいけれども遊女のしながあると非難されたことなどがあつて最近はやらなくなつた。内へ這入つて木戸を閉ぢ、屋臺に戻つて眞中に坐る間に「今更返らぬことーながアら」と淨瑠璃は進み「わしと云ふものないならば」兩手を出して眺め、それから上手の屋臺に向ひ兩手をついて辭儀をして「舅御様もお通に免じ」そのまゝ、前に差出した右手の掌を眺めてから、正面を指差して、首を傾げて舅に縋ることなし「子まアでなしーたアるウー」身體を起して下手斜に向き、兩袖で胸を抱いて向ふを見やると「三勝殿……」となり、吾にもなくしほれて面を伏せ「（チチーン、ッン）」とオくにーもーオオーオ」氣をとり直して上手屋臺に向ひ「（チーン）」よびイ、いーれェさしやんしたら」右手で正面を指差して向ふを見やり、

再び上手に向いて右手を下について舅に縋るこなし「(チーン、チン)半七様の身持もなほオリ」で、正面に直つて、右ひざを立てかけて右手で正面向ふを指差し、逆に左ひざを立てかけて左手で下手斜の方を指差し「御尠當も……」で、トンと左足で踏んで右足を入込んでひざを立てかけ、右手を左遣ひに預けて斜に背を見せたネジの形で上手屋臺を見込んで「あるまいに」となる。「(チチン、ツン)思へば……思へば……」右ひざを立てかけて、右袖をゆつたりと寄せて來て見下し、逆に左ひざを立てかけて左袖をゆつたりと寄せて來て見下す。卑下するやうに吾身を眺めるこの型は、肩から流れる線といひ、膝のつくる線といひ、女の現實的な美しさ以上に、美しく、いとほしいものを表はす。「(チーン)……このーオ、オオオオー」兩袖を左右に展げて、身體を左へ傾け氣味に向ふを見やり「そのーオオーが」兩袖でサツと顔を掩ひながら腰を下して、トンと足拍子を入れる。身體を起して「(チン、チン、チン)去年の秋の患ひに」兩手を輕く揃へて出して眺め、左の腕を優しく撫で「(チン)いイーツそ(チーン)死んーでしまふたらー(チン、チン)「兩袖で胸を抱いて悶え「こうした難儀は……」右足を入込んで、上手屋臺を見込み、すぐトーン、トーンと下手斜へ身體をそむけ「出來なアいーものーオ、オオオ、オオオ……」と、袖を口に當てゝ節にのり、やがてそのまゝアゝゝ……と泣く。(チンチンチンチンチン、チンチンチンチン)の合の手で正面となり「御氣に入らぬと知りイながアら」一寸恥らつて、右手を鬢の後へもつて行つてから、左ひざの上を兩の手で交互に撫で「(チン、チン)未練な私がア」兩袖を搖りながら

前に進んで、次の(トーン、トーン)の間を拾つてトン、トンと上手斜に身體をそむけ「輪廻ゆゑ」一杯に、頭を正面からクツて來て、袖を顔に當てる。(チチチン、チーン、チレチーン、チン)の合の手で正面へ戻つて、兩手を後へ廻して帶を締め直し「添臥しはー叶はずとオもオオオーオオオーオオオオオオオ(チチチツーン)」右手を前に差出して押へるやうに動かし、左手を同じく押へるやうに動かし、もう一度右左と繰返し「お傍に居たいと辛抱して」坐つて、兩手を大きく廻して來て前について辭儀をし「(チンチン)こオれまで居たのがアーア」立上つて、床のイキと共にトンと右足を入込んだのを、一旦引いて直つてから改めて、次の「ア、ア、ア、ア」の節へのつてトントントン……と彈んだ足拍子を入れて上手へ進み(チチチーン、チーン)で、止り右足を入込んでおいて「お身の——」でクリ頭をしながら、右袖を左遣ひに預け「あーだア」一杯に後振りとなる、左遣ひが兩袖を鳥の翼のやうに左右に展げると、頭を左から振返らせ、右から振返

らせ、トド腰を下してトンと足拍子を入れる。

（チーン、チチンツチチチン、チレチン、チツテーン、チンチンチンチン）の合の手で正面へ戻り「今の思ひに」で、正面框から土間に下り（主遣ひと左遣ひとが框の内に殘り、足遣ひのみが外側から遣ふ）「くーウウ、らーア、ぶウれ」右手を右へ流し、左手を左へ流し、右左と繰返して下手へ進むこなし、次の（ポトテン）で、トトトンとよろめいて框に腰を落し左ひざの上に兩手を重ねて「エエエエーエエ、エエエエーエエエエーエ」の節にのつて頭を細く振りながら堪へる。絃と節にのつた科の樂しさは人形芝居の大きな特色である。そしてこれに程々の足拍子が入ることによつて感興は一入加はる。こののつた科は尚つゞく。立上つて聲を洩らさないやうに右袖を口に當て、左手をその袖口に添へて「エエエエーエエ――エばーア、アーア、アアア、……」と、節にのつて頭を輕く振りながら、トーントーン……と足拍子を踏んで「アア、、、……」と、段々早間になる。「一年前にこの園が」右手を伸べて眺め、同じく左手を眺め「死ぬる心が……」左手を右で取つて、トンと足拍子を入れて下手の後振りとなり「エエエつかなんだ」右から振返り、左から振返り「アーア、アーア」と、制し切れなくなつたやうに大きく身悶えして、後「アアア、アアア……」と節にのつて頭を振り、段々早間になつてやがてカア……と框の上に泣き伏す。「（チンチン、チンチン、チンチンチンチン）堪へてーたべ半七様」で正面に戻つて上にあがり「わしや（チーンチン）此様にー思ふて居ると――」行燈のところへ進み、手を添へて向ふを見やり「うウウらみーイつらアみーはーアア」の間に兩袖で胸を抱いて淋しく眞中に戻り、上手向きに坐つて兩手を内懷に入れ、顎を襟先に埋むやうに落し「つゆウーウほオどーオーオー（チーン）オーもオオ、、、、…も」で、一つ肩を搖つておいてトンと足拍子を入れて極り、（チ、チ、チ、チチチチ……）正面から下手斜になり、右手を懷から出して襟に挿入れ、左袖はそのまゝ流した形で「なアほー（チーン）彌やまアさるウウ」左からクリ頭をして「憂きー、イイイイイイイおオもーオーオ――ひ――」一杯に面を伏せ、昂ぶる感情をジツと押へてゐる心を肩で息することによつて表はす。

身體を起して『明日は疾うから父様に』半兵衛と語りつゞける父宗岸の居る上手の屋臺を左手で指差し『又連れられて天滿へ去に』右手で正面向ふを指差し『半七様のひよつとしたはかない便りを聞くならば』身體を左右に傾けて心許なげに正面向ふを見『思ひ死に死ぬであらう』と、あたりを憚つて袖を口に當てゝ伏し『とても浮世は立たぬ覺悟、嫌はれても夫の内』下手上手を見返り『此家で死ねば後の世の、もしや契りの綱にも』と、はかない望みに思ひ至つて、トンと膝を打ち「餘所の見るウめエエーもーオオ（チーン）いイーぢイイイーらーアしイイーしイ――」一杯に、兩袖で胸を抱いて打沈む。（昭和二十年四月、南座）

以上文中に人形操作上の通語を用ひたが、それらに就ては機會を見て説明したい。（完）

寫眞は舊文樂座所藏カシラ「太夫」役名は阿古屋、戰災首の一つ